

学校休業時における北海道手稲養護学校の取組について

—Zoom を活用した重度・重複障害児へのオンライン授業を通して—

○小田 亨
(北海道手稲養護学校)

KEY WORDS: オンライン授業、体験的な学習、コミュニケーション

I 学校概要とコロナ禍における教育活動について

北海道手稲養護学校（以下、本校）は、主に隣接する北海道立子ども総合医療・療育センター（通称コドモックル）に入院する幼児児童生徒を対象とする肢体不自由及び病弱教育を行う特別支援学校である。在籍する子どもたち全てに基礎疾患があるため、コロナ禍での学校教育においては、何より感染予防を第一に考え、安全で安心な教育環境の整備を基本とした上で学習活動の充実を図ることを重点としている。

II Zoom を使用したオンライン授業までの経緯

本校では、臨時休業中の学習保障の一環として、ソフトバンクの社会貢献事業として貸与を受けたタブレットと Wi-Fi を活用して、オンライン授業を行った。オンライン授業で使用する遠隔会議システムとしては、令和元年度までに学習活動で使用実績のある Zoom を活用することとした。

III オンライン授業の実践事例

オンライン授業を開始するに当たっては、貸与を受けたタブレットの台数等の関係から、各学部最終学年を優先的に実施することとし、各家庭での Wi-Fi 環境の整備があることや本人または保護者が必要な設定を行えることを条件に、保護者から実施の希望をとった。

オンライン授業の導入に際しては、①無理をせずにできるところから実施すること、②極力簡単なプロセスで行うこと③セキュリティ対策を徹底することの 3 点を教職員間で確認をし、保護者にも理解を得た上で実施している。

また、授業の実施に関しては、学校から教員が行うだけでなく、在宅勤務中の教員も自宅から授業を実施できるように整備した。その際には、セキュリティとモラル上の問題から、ホストとなるタブレットは必ず学校を中継して接続することとした。

(1) オンライン授業の実践①～小学部 6 年生：重度・重複障害のある児童への授業

通学生の子供を対象に、自宅と学校をつなぎ授業を行った。保護者とも相談をし、児童の疲労度も考え合わせ授業時間は 1 日 1 回 20 分とした。実施に当たっては、保護者の協力が必要なため、事前に担任が自宅に教材を届け学習内容の説明を行った。本児童にとっては初めてのタブレットを介した教員とのやりとりであったが、学校での学習活動と同様に、「国語」でのロールプレイを交えた読み聞かせでは、自己の役割も理解して求められる動作を行ったり、「自立活動」では、教師の指示に応じてひもスイッチで楽器やおもちゃを操作したりすることができた。また、担任に表情等で意思表示を行う場面もあり、本児の学校でのコミュニケーションの状況を保護者が確認できる貴重な機会にもなった。さらには保護者が本児童とともに担任に見せるなど、授業以外での活用を広げ保護者との連携にもつながることができた。今回の重度・重複障害のある児童へのオンライン授業について、留意点として以下の内容を考えている。

・学習方法はオンラインであったが、学習内容は保護者による身体的な接触を伴う体験的な学習であった。重度・重複障害児は体験的な学習を通して、理解を図ることができる

と考える。また、支援には支援者の身体的な接触は必要不可欠である。新しい生活様式がなじまない側面もあり、オンラインとオフラインをバランスよく活用しながら、学習を行う必要がある。

- ・今回のオンライン授業の取組では、本児童の体力や集中度を考慮して、1 回の学習時間を 20 分間としたが、それぞれの児童生徒の体力や集中度を考慮した学習時間の設定が大事である。また、開始時間を本児童の覚醒状態がよい 14 時としたことも、重度・重複障害の子どもにとって、体力面や精神面で負担の大きいオンライン授業を効果的に導入する上で大事なことであった。
- ・今回の授業のように、教師が話しかけるだけの一方の授業ではなく、児童が主体的に参加できる体験的な活動を行うと児童生徒が意欲的に取り組むと考えられる。
- ・オンライン、オフラインにかかわらず、授業においては、日頃からかかわる支援者とのコミュニケーションが重要である。

学校再開後、本児童はオンラインで、接触が難しくなった医療機関の入院生と朝の会で交流したり、その入院生と一緒に光遊びを行い、タブレットの画面越しに光を注視することができた。学校休業中に経験した学習方法を学校再開後も行っている。また、訪問教育学級の児童とオンライン授業で交流することもできた。今後、新型コロナウイルス感染症の再流行があった際にも学びを止めることのない継続的な学習が必要であると考えられる。

IV 今後の課題と方向性

臨時休業中は、児童生徒の継続的な学習の保障を主な目的にオンラインによる授業を実施してきたが、学校再開後においては、感染予防対策の一環としてだけでなく、必然的に活用が多くなるこの機会を有効に生かして、オンライン授業の実施も含めた ICT の効果的な活用を再度検討し、教育課程の見直しを図っていくことが必要と考える。そのためには、教職員のスキルの向上を図るとともに積極的に ICT の活用を学校全体で促進させ、実績と評価を積み上げていくことが当面の目標となる。遠隔システムの活用の取組については、各校個別の取り組みにとどまらず、北海道内の肢体不自由校全体で共通理解し連携した取り組みへと広げることが必要である。学校休業中の学習活動の継続性を図るためにもオンライン授業は有効と考える。しかし、当然ながら対面での学習効果も高く、児童生徒の発達段階によっては、身体的な接触を伴う学習は発達において特に重要な位置を占める指導方法となる。同時に肢体不自由のある児童生徒の将来には ICT 活用が大きな役割を果たすという面もあるため、その活用を計画的、段階的に学習活動に取り入れていく必要がある。今後は、オンライン授業の利点と対面授業の利点を整理し、児童生徒の発達段階や特性などの実態や将来を見通した教育的なニーズに応じた効果的な活用について、新しい時代に生きる教育課程の改善を図っていきたいと考えている。